

「男、突っ走る！」

第27回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

入沢	佐藤	尾形	門野	杉島	中岡	高山階	山辺	田崎	志田	木内	木内	木内
			安賢	恭平	壮吾	康行	一磨	良樹	悠喜	真保	孝志	雅也
			(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(45)	(47)	(18)
			元中央高校生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	中央高校3年2組生徒	雅也の母	雅也の父	中央高校3年2組生徒

雅也、良樹、一磨、康行が昼食を食べながら話している。

康行「え？ 木内も進学するの？」

雅也「そう、専門学校に」

一磨「何の？」

雅也「名古屋にね、シナリオライター専攻っていうのがあるデザイン系の専門学校を見つけたの。出版社とか業界とのつながりがある学校なの」

良樹「けど、どうしてまたいきなり専門学校なんて」

雅也「これまで、何社も脚本家の事務所やプロダクションに売り込んだけど、結局どこも採用されなかったでしょ。それって、根本的に俺の実力が伴ってなかったんじゃないかって思ったの」

一磨「なるほどねえ」

雅也「この間、実際にオープンキャンパス行ってきたんだけど、体験授業の先生もコピー

ライターとして実際に現場で仕事してる先生だった」

康行「確かに、現役で仕事をしている業界人の元で学べるのは大きいかもしれない」

雅也「だら。だから、その専門学校に行きたいなって思うようになったの」

良樹「安代ちゃんには話したのか？」

雅也「うん、今朝職員室行って、伝えてきた」

良樹「そっか」

雅也「もつと早く、気が付けば良かったのかもしれないけどね」

一磨「でも木内は頑張ったよ。検定勉強だつてあるのに、売り込むために脚本書いてさ」

雅也「まあ、全部が全部新作ってわけじゃないけどね。一度書いたやつを、部分的に直したり、構成やあらすじは同じで、ちよつと内容を変えてみたりね。毎回毎回、一から新作書いてたら体力持たないよ」

康行「それでもよく、次々にストーリーリー浮かんでくるよね」

雅也「でも書いているうちに、限界が来たり、無理やり物語膨らませたりすることもあるんだよ。専門学校に行けば、そういうアイディアの授業もあるみたいだから、もっと中身の濃い物語が書けるかもしれない」

康行「じゃあ、その専門学校に行くのは、もう決めたんだね」

雅也「うん。何の伝手もなく、実力もない状態で今のままのやり方を続けても、何も変わらないと思って。せっかく、名古屋で専門的に学べる学校があるんだったら、そこでちゃんと一から学びたくてさ」

一磨「それでもっと木内の作品が良くなるんだったら、専門学校に行くっていう選択肢もありかもしれないね」

雅也「だね」

康行「頑張っつてね」

雅也「ありがとう」

安代と入沢が仕事をしている。

入沢「じゃあ、木内君は専門学校に行くつもりで、進路変更したんですか？」

安代「そうなんです。今朝私のところに来て、専門学校に行くことにしましたって報告に来たんですよ」

入沢「脚本を学べる専門学校なんですか？」
安代「脚本だったり、根本的にストーリーやキャラクターの作り方だったり、アイデアアとかの発想力を鍛えたり、実践型の授業をしてるみたいです。（とパンフレットを見せて）進路指導の先生からお借りしたんですけど、どうやらうちの卒業生も、何人かこの学校に進学した実績があるみたいです」

入沢「（パンフレットを見ながら）名古屋芸術専門学校……へえ、全国にも系列の学校がたくさんあるんですね。それに、トリマーやペットシッターなどの動物系、柔道整復師の医療系、パティシエや調理師の飲食

系、俳優や声優などのエンタメ系って、結構それぞれに専門的な学校を持ってるんですね、ここのグループ」

安代「そうみたいです」

と、佐藤が入ってくる。

安代「佐藤先生もご存じですよ。滋政学園グループっていう、専門学校を運営している学校法人」

佐藤「もちろんですよ。滋政グループといえば、専門学校の規模では日本一って言われていますからね。私も、以前進路指導主任を担当をしていた時、この学校のことは聞いたことがあります」

入沢「そうなんですか」

佐藤「その学校がどうかしたんですか？　　言今年は、確か五組で三人ほどその学校に行くという話を聞きましたが」

安代「うちのクラスでも、一人この学校を受験しようとしている子がいるんですよ」

佐藤「二組にですか？」

入沢「木内君です」

佐藤「あの木内がですか？　けど、あの子は確か脚本家になるって、今作品を売り込んでるんじゃないんですか？」

安代「それが、専門的にもっと学びたいからって、今朝私のところに伝えに来たんです」
入沢「何でも、シナリオライター専攻っていう学部があるみたいで、それに魅力を感じたみたいですよ」

佐藤「へえ、あの学校にそんな専攻ができたんですか。確かにシナリオライターとなれば、今の木内が目指したい業界ですからね。そこでより専門的なことを勉強すれば、あの子のためには良いかもしれないですね」

入沢「検定勉強もやって、今度は専門学校への準備もして、大丈夫ですかねえ」

安代「そこを、私たちがフォローしてあげましょう。何事も一生懸命に頑張ってる木内君なんですから」

入沢「そうですね」

3 焼肉屋（夜）

雅也、賢哉、悠喜、壮吾、恭平が食事を囲んでいる。

賢哉「みんな元気そうじゃねえか」

壮吾「そりゃ、あと四ヶ月もすれば卒業なんだよ。今のうちに、元気に楽しんでおかないとね」

悠喜「早いよな、もう卒業なんて」

賢哉「俺も、今思えばみんなと一緒に卒業したかったな」

雅也「だから、あの時あれほど止めたのに：
：今になって後悔したって遅いんだからね」
賢哉「分かってるさ、そんなこと」

恭平「通信高校のほうは、どうなんだ？」

賢哉「まあ、何とかやってるよ。試験問題も結構簡単なんだよ」

雅也「通信って、あともう一年あるんだよね？」

賢哉「そうなんだよ。二年生の途中で、俺学

校辞めただろ。通信は三年課程で、みんなが三年生になったタイミングで、俺はもう一度年生から始めることになったから、みんなより一年遅く高校を卒業することになる」

悠喜「そういうことなんだ」

雅也「順当に通ってれば、俺たちと一緒に卒業できたって言うのに……俺、未だにあの時かどけんを止められなかったこと後悔してるんだから」

賢哉「そんなこと気にしてたのか？」

雅也「当たり前でしょ」

悠喜「木内からしたら、おっちゃんは大事なクラスメイトだったんだから、そう思うのも無理ないだろ」

雅也「分かってんじゃない」

悠喜「そりゃ、三年間も同じ教室で暮らしてたら、お前の気持ちぐらい分かるよ」

賢哉「そういえば、みんなは進路決まったのか？」

恭平「俺は、これから大学受験」

悠喜「俺は美容院に就職する」

壮吾「俺は、お茶の製造工場」

雅也「俺は、専門学校をこれから受験する」

賢哉「あれ、お前脚本家として就職するんじゃないのか？」

やなかったのか？」

雅也「これまで、就職するつもり百パーセン

トだった俺にとって、入試って言う言葉は

縁もゆかりもない言葉だった。大学や専門

学校を受験する友達を見送ってきて、就職

試験になったら自分は見送られる側だって

ずっと思ってた。ずっと父親が単身赴任で

家にいなくて、決して裕福な生活を送って

きたわけじゃないから、これまでの俺は一

日でも早く働いて、お金を稼ぎたいって思

ってたの。それに、我が家には大学や専門

学校に行かせる余裕なんて絶対ないもの。

俺が行きたいと思ってる専門学校は私立の

学校だから、当然学費だってバカにならな

い。そんな理由もあって、大学や専門学校

っていう進路なんて考えてもいなかった。

でも、シナリオライターっていうのは、専門的技術のいる分野だから、専門学校でしっかり学ぶっていうことも大事なんじゃないかなって思うようになったの。大分ギリギリになっての進路変更になったけど、やっぱり、俺は脚本家になりたいから」

賢哉「そうだったのか。まあ、木内だったらどこの環境でも上手くやっていけるだろ。

俺をちゃんと扱えたぐらいなんだから」

恭平「（笑いながら）どういうこと、それ？」

賢哉「前に木内には話したんだけど、中学の時に一緒にいた連れは、基本的に俺と同じようなタイプだったんだけど、木内はちゃんと悪いことは悪いって、俺の動きに良い意味でブレーキをかけてくれたんだよ。そういう連れは、これまでにいなかったら、ある意味こいつの存在は珍しかったんだよ」

雅也「俺だって、今でもはっきり覚えてるよ。一年生始まってすぐ、俺に『おはよう』っ

て声かけてきれくれたこと」

賢哉「そんなこともあったな。それに、俺最初は志田のことが苦手だって勝手に思ってたんだよ」

悠喜「マジで？」

雅也「そんなこともあったね。それがいつの間にか、こうしてみんなと仲良くなって、不思議な縁だよな」

賢哉「卒業してからも、定期的にこうやって集まると良いな」

恭平「そうだな」

壮吾「就職や進学で、なかなか予定合わせるのは難しくなることだってあるかもしれないけど、集まるときにちゃんと集まっておきたいよね」

賢哉「ああ」

雅也「（焼いてある肉を見て）あ、肉焦げてる」

一同、慌てながら肉をそれぞれ自分の皿に取っていく。

4 木内家・居間（夜）

孝志が専門学校のパンフレットを読んでいる——真保が風呂から上がってくる。

真保「まだ見てるの」

孝志「雅が行きたい学校がどういふところなのか、知っておきたくて。こうして見ると、結構業界の繋がりがすごそうだな。名誉顧問の顔ぶれだって、芸能人や文化人とか、結構著名な人も多いじゃないか」

真保「まだ行くなって決まったわけじゃないけどね」

孝志「でも、もう入学願書と自己PRの書類、出したんだろ」

真保「まあね」

孝志「雅は、あの学校に行くつもりでもう準備してるみたいだし」

真保「それはそうだけど、現実的に考えても見てよ。あんたがこっちに戻ってきて、ま

た元の生活が始まったって言っても、雅は元々就職するつもりだったのよ。進学なんて全く考えてもいなかったから、私だっただけの子に払う学費なんてもうないと思ってたから、そういう蓄えだっただけだしさ……」

孝志「やっぱり、奨学金借りるしかないのか」
真保「学校を卒業してから、あの子がちゃんと返済していけば良いけど。三年間通うってなると、それなりの金額借りることになるのよ。月々少しずつ返済していこうと考えると、利子も踏まえて全額返済するのには何年かかるか。その覚悟が、あの子にあれば良いけど」

孝志「これまでも、あいつは自分が決めたことはちゃんとやってきたじゃないか。それは俺が福岡にいるときから、お前が俺に教えてくれたことだろ」

真保「学校生活で頑張ってきたことと、これから仕事をしていくことでは、全然訳が違
うでしょ」

孝志「同じだよ。確かに就職と進学じゃ、全然違うさ。けど、あいつの中で根底にある脚本家になりたいっていう夢は、ブレてないじゃないか。だったら、そのブレない軸をあいつに持ち続けてほしいじゃないか」

真保「仮に奨学金を借りたとして、最初の一年間の授業料や入学金は、前金として先に払わなきゃいけないのよ。約百五十万もかかるっていうのに、どうやって捻出するっていうのよ。息子可愛さに応援してやる気持ちは分かるけど、現実的な問題も考えてよ」

孝志「……」

真保「岐阜の両親に相談しようかしら」

孝志「え？」

真保「それしか方法ないでしょ」

孝志「まあ、広島うちの実家よりかは、相談しやすいだろうけどな。それに、経済的な余裕も岐阜のほうがあるだろうし」

真保「両親と、お姉ちゃんに聞いてみるわ」

真保、孝志からパンフレットを奪うと、
険しい顔で読み始める——何も言い返
せず、やりきれない顔で真保を見る孝
志。

5 喫茶店（数日後）

N 「学校で何回かの面接の練習をした末、と
うとう、十二月に入って最初の日曜日、入
試面接の日がやってきました」

雅也と真保が、コーヒーを飲んでいる。

真保 「じゃあ、母さんここで待ってるから」

雅也 「うん。面接だけだから、そんなにはか
からないと思う」

真保 「そう」

雅也 「ねえ。入学金のこと、相談したんでし
よ、岐阜のおばあちゃんに」

真保 「うん」

雅也 「ばあちゃん、何て言ってた？」

真保 「合格が決まったら、一度相談に来なさ
いって」

雅也「そっか」

真保「あんたの口から、おじいちゃんを説得しなさい」

雅也「そうだね……」

真保「おじいちゃんは、中学卒業してすぐに豆腐屋を継いだでしょ。だから、娘や孫にはちゃんとした環境があるうちは、勉強をしておいってずっと思ってるのよね。私もずっと、『高校はちゃんと行っとけ』

りあえず大学や専門学校で技術を身に付けて、『って散々言われた。高校の先生からは、大学に行ける実力はあるって言われたけど、母さんそこまで勉強することは好きじゃなかったから、わざわざ大学に行つてまで勉強しようとは思わずに就職の道を選んだ。おじいちゃんには、この話を就職が決まつてから伝えたから、『俺は何も聞いとらん』って不機嫌になったことを今でもはつきり覚えてる。それぐらい、おじいちゃんにと

って勉強をする環境があるところに行くってことは、自分が行けなかったからこそ、周りに期待しちやっつて部分があるんじゃないかな
いかしらね」

雅也「そうだったんだ……」

真保「だから、雅の説得次第では、おじいちゃん、分かってくれると思うけどね」

雅也「だと良いけど……」

真保「……」

雅也「あ、良樹たちに連絡しとかなきゃ」

と、携帯電話を開き、LINEを立ち上げる雅也。良樹、一磨、康行との四人のグループにメッセージを入力する。

雅也の声「これから、専門学校の面接に行つてきます！」

と、携帯電話の1のボタンを押して、画面を更新する。それぞれ返信が来ている。

良樹の声「頑張れ！」

一磨の声「頑張つて！」

康行の声「フアイトです！」

と、そのメッセージを見て微笑む雅也。

真保「返信来た？」

雅也「うん。頑張れって、みんなからLINE

E来た」

真保「応援してくれてるんだ、みんなあんたのこと」

雅也「今に、みんなが俺のファンになってくれると良いんだけどね（と笑う）」

真保「……」

雅也「じゃあ、行ってくる」

真保「うん、頑張ってきてね」

と、出ていく雅也——見届ける真保。

6 名古屋芸術専門学校・表

雅也がやってくる——校舎を見上げる。

7 同・9階・図書室

雅也のほか、数名の受験生が待機をしている——落ち着かない様子の雅也で

ある。

と、職員が入ってくる。

職員「木内さん、面接の準備ができました。

どうぞ」

雅也「はい」

と、職員に誘導されて、出ていくとエレベーターへ入っていく。

8 喫茶店

コーヒーを飲みながら待っている真保。

9 中央高校・職員室

安代が仕事をしている——ふと手を止めて、時計を見上げる。

安代「もう、始まった頃かしら……」

10 木内家・居間

テレビを見ている孝志——壁に掛けてある時計を見ている。

孝志「……」

11 名古屋芸術専門学校・2階・カウ
ンセ
リングルーム

雅也がじっと待っている。

N 「様々な人たちに見届けられながら、学校職員との一対一の面談という名の入試は、何とか終わりました。自分がこの学校で何をしたいのか、そして卒業後に自分がどういう職業につきたいのか。僕にとって、脚本家になりたいという、ありのままの思いを伝えて、残すは合否判定の通知を待つのみとなっていたのでした」

つづく